

令和3年度 学生の学修時間・学修行動の把握に関する実態調査 分析報告書

1. はじめに

本調査の目的は、分析結果をもとに、教育活動の見直し及び、学生の自主学習を促し「学修」を身につけさせ、大学教育の質の担保を高める方策の検討に資することにある。学修時間・学修行動のみならず、学生個別のGPAや属性を踏まえた分析をおこなった。

2. 分析結果

ここでは基本統計量を示した上で、今回の調査データに成績データ（GPA）と属性データ（学科、入試区分など）を加えておこなったクラスター分析と重回帰分析の結果を示す。

(1) 基本統計量

本調査における在籍者（1187人）に占める回答者（793人）の割合は66.8%であった。（回答者の重複を修正した上で統計データを修正済み。）他の基本情報は表1の通り。

表1

キャリア別コース制の所属割合	72.3%
課外活動団体（クラブ活動）の所属割合	33.0%
課外活動団体（クラブ活動）に充てた時間（1週間あたり平均）	35.2分
地域活動やボランティア活動に充てた時間（1週間あたり平均）	7.3分
アルバイト活動にあてた時間（1週間あたり平均）	584.0分 (10.23時間)
家庭での学習時間（1日あたり平均）	69.6分
予習・復習にかかる学習時間（1日あたり平均）	
平日	39.2分
長期休業期間中（冬季休暇・春季休暇）	43.4分
土曜日・日曜日・祝日	41.7分
授業以外の勉強に充てた時間（1日あたり平均）	
平日	37.8分
長期休業期間中（冬季休暇・春季休暇）	38.2分
土曜日・日曜日・祝日	37.1分

(2) クラスター分析の結果

本学の学生たちは観測不可能ないくつかの異なる行動特性をもつクラスに属していると仮定し、どのような行動特性をもつクラスに分類できるか、クラスター分析で検討する。

最適なクラスター数を判断するには至らなかったが、概ね8つのクラスに分類するのが適当であろうと結論付けた。表2には、各クラスを特徴づける調査データと在籍者データをまとめている。 ※詳細は『学習状況アンケートについて』を参照のこと。

○成績（GPA）が高い集団の特徴（Cluster 5と6）

- ・Cluster 5は部活動への適度な参加とコース制への所属が特徴である。これらの特徴はそれぞれ「積極性」と「将来への関心の高さ」を示唆し、成績（GPA）に正の影響を与えると考えられる。

・ Cluster 6 は指定校推薦での入学、(高校時の) 評定平均の高さが特徴である。評定平均の高さは「基礎学力や学習習慣の定着」を示唆しており、各個人の学修行動が成績 (GPA) に影響していると考えられる。

○成績 (GPA) が低い集団の特徴 (Cluster 7 と 8)

- ・ Cluster 7 と 8 は、指定校推薦以外で入学し、評定平均の低さ、コース未所属が共通した特徴である。
- ・ Cluster 7 はアルバイト時間の長さ、Cluster 8 は部活動時間の長さが個別の特徴。
- ・ 「学習時間を確保できないこと」に加え、「学習習慣が定着していないこと」が、成績 (GPA) の低さにつながっていると考えられる。

表 2 (時間の単位: 分)

Cluster (集団の特徴づけ)	調査データ				在籍者データ			
	予習復習 (1日平均)	部活 (1週間平均)	アルバイト (1週間平均)	コース	GPA	学科	入試区分	評定平均
1	41.1	-	599.6	-	低	経営	指定校	高
2	40.9	-	630.7	-	中	経済	指定校	高
3	50.8	-	597.3	所属	中	経営	-	中
4	38.0	-	472.7	所属	中	経済	-	中
5	36.0	125.3	567.8	所属	高	-	-	中
6	29.6	126.6	568.5	-	高	-	指定校	高
7	38.9	-	752.8	未所属	低	-	-	低
8	37.8	208.2	373.2	未所属	低	-	-	低

※ 網掛け(薄い赤)-全体平均より低い, 網掛け(青)-全体平均より高い, 網掛け(赤)-最大値

(3) クラスタ情報をもとめた重回帰分析の結果

上記のクラスタ情報を踏まえて、GPA を被説明変数とした各要素の重回帰分析から次のことがわかる。

- 予習復習時間等の自主学習時間は GPA に有意な影響をもたない。
- GPA に正の影響をもつ要素は高校時の評定平均、オンデマンド講義の学習時間である。前者は基礎学力や学習習慣が身につけていることがその理由と考えられる。後者の理由は定かではないが、オンデマンド授業活用の重要性を含意している結果である。
- GPA に負の影響をもつ要素として最も特徴的なのはアルバイト時間である。

3. おわりに

学修時間・学修行動が成績に正の影響をもつ直接的な結果は得られなかったが、その背後にある個人の特性について理解が深まった。すなわち、基礎学力や学習習慣をベースに、積極性や将来への関心の高さといった特性があることで、自主学習がおこなわれ成績につながる可能性が明らかになった。自主学習時間への直接的な働きかけだけでなく、このような特性を身につけさせ、伸ばす取り組みを検討することも大学教育において重要である。

以上